

中学生における非行傾向行為および初発型非行に関する研究

豊田 あやこ*・下田 芳幸

Study about conventional mild delinquency among junior high school students

Ayako TOYOTA・Yoshiyuki SHIMODA

キーワード：中学生，非行傾向行為，社会的スキル，セルフコントロール

keywords：junior high school students, conventional mild delinquency, social skills, self-control

問題 と 目的

中学生の非行に関する先行研究と「非行の捉え方」という視点の有用性

児童生徒の逸脱行為は社会問題として注目され続けている（例として秦，2000；麦島，1990）。その中でも，中学生の非行による検挙数は刑法犯の少年のうち4割程度を占めており（法務省，2011），中学生における逸脱行為は憂慮すべき問題であるといえる。

中学生の非行に関する調査研究として，例えば松井（2002）は日本の若者について，物質思考，現在思考などの偏った価値観があり，性に関することをはじめとした非行に対しては許容的であること，愛他性が低く，対人関係が弱いといった，他の国に比べてかなり顕著な問題傾向が存在することを指摘している。また緑川（1999）は，“単純な動機，かつ犯行手段が容易で，結果が比較的軽微な非行”であるものを「初発型非行」と定義した上で，「初発型非行」から「本格的な非行」へと深化するプロセスの存在を指摘している。なお「初発型非行」の具体例としては，万引き・自転車盗難・オートバイ盗難・占有離脱物横領があり，一方の「本格的な非行」の具体例としては，粗暴行為・薬物乱用などが挙げられている。さらに最近の研究では，こういった「初発型非行」よりもさらに非行性の軽微な逸脱行為を経験する時点から，非行性の深化が始まる可能性があることが指摘されている。（西野・氏家・五十嵐・井上・山本，2009）。

小保方・無籐（2005a）は，中学校に通っている

通常の中学生を対象に，学校生活の中で比較的良好に見られる，初発型非行よりさらに軽微な，喫煙などの行為を「非行傾向行為」と定義し，調査を行った。その結果，こういった逸脱傾向のある友人が促進要因となる一方，セルフコントロールや親密な親子関係といったものが抑制要因になることを明らかにしている。非行は深化することから考えると，こういった，非行の最初期段階である非行傾向行為に関する知見を得ることは，より本格的な非行の芽を摘むという観点から，非常に意義があるといえる。

こういった非行傾向行為に関する知見を得る上で本研究は，「非行をどのように思い，どのように定義づけているか」という個人の認識，いわゆる「非行の捉え方」に着目する。この点に関連して，例えば櫻庭・松井・福富・成田・上瀬・宇井・菊島（2001）は，性非行と位置づけられる「援助交際」について高校生を対象に調査を行う中で，「援助交際」に対して寛容である／抵抗があるといった個人の態度によって，実際の経験に生じる差異を報告している。また松井・中村・堀内・石井（2005）は，他人や社会への恥意識が非行に対する罪意識に影響を及ぼすことを示し，その罪意識が非行の抑止要因となると論じている。

これらのことから，一般的な非行に関して，認知的な側面，すなわち中学生がどのような認識を持っているか，あるいはそういった認識が実際の非行傾向行為あるいは初発型非行とどのように関連しているか，を明らかにすることは，非行の実態の把握，非行傾向行為あるいは非行行為の抑止要因を検討する足掛かりになると思われる。しかしこれまでのところ，このような観点に立った検討はされていない。

よって本研究では，中学生の，初発型非行および

*2012年3月卒業

非行傾向行為の捉え方（以下、初発／非行傾向態度）について調査を行い、実際の初発型非行ないし非行傾向行為（以下、初発／非行傾向行為）との関連を検討することを第一の目的とする。

非行と社会的スキル・セルフコントロール

非行の捉え方は、いわば非行に関連する認知的要因についての検討であるが、当然ながら、行動的な側面が非行に関連することも十分考えられる。本研究の第二の目的は、この行動的側面の要因として、社会的スキルおよびセルフコントロールと非行との関連を検討することである。

人は人と関わり合いながら社会の中で生きていくわけであるが、そのために必要とされているスキルは、社会的スキルとよばれている。そして心理学の分野では、円滑な対人関係を築くための必要条件として注目され、中学生に関する研究も多くなされてきた（例えば飯田・宮村，2002；戸ヶ崎・岡安・坂野，1997）。

社会的スキルの定義は様々であるが、広義のものとしては“人間関係を形成し、維持するために必要とされる要因の一つであり、一般に①社会状況において仲間から受け入れられる行動、②強化を受ける確率を最大にし、罰や消去の随伴性を減少させるような状況に依存したと社会的行動、③ある状況で重要な社会効果を予測する社会的妥当性のある行動”（Gresham, 1986；Elliot & Gresham, 1987）、狭義のものとしては“対人場面において相手に効果的に反応するために求められる言語的・非言語的対人行動」（相川，1999）”などがある。

社会的スキルの低さは、中学生の仲間関係に影響を及ぼしたり（江村，2007）、不登校傾向といった非社会的な学校不適応のリスク要因となるほか（五十嵐，2011）、非行のような反社会的な不適応とも関連が指摘されている（石井・新堂，2011；磯部・堀江・前田，2004）。さらに、非行少年や攻撃的な幼児といった心理的リスクを抱えた人を対象とした社会的スキル研究や社会的スキル訓練についての報告もある（松嶋，2001；品田，2008）。その一方で、大多数の中学生については、非行行為経験がない、あるいは重度に至らないまま学校生活を送っている。その中では、社会との結びつきを意識し、自己を保ちながら他者とうまく付き合っていくことが求められている。したがって、非行が最初期から深化していくプロセスにおいて、行動的側面としての

社会的スキルに着目した検討を行うことは、非行の予防とともに矯正教育での実践を考えるうえでも有用であると思われる。したがって本研究では、非行の初期状態である初発／非行傾向行為と社会的スキルの関連を検討することとした。

また、小保方・無藤（2005a）が明らかにしたように、より円滑な社会生活を営む上では、対他者、すなわち対人関係に関わる社会的スキルのみならず、対自、すなわち自分自身のコントロールに関するスキルとしてのセルフコントロールに着目することも重要である。

セルフコントロールとは、“自分の心と身体の状態を自分の力でコントロールすること”といった概念である（小保方・無藤，2005a；崔・庄司，2010）。Gottfredson & Hirschi（1990 松本訳 1996）は、こういったセルフコントロールの低さを、通常の犯罪や多くの犯罪類似行為の原因として言及している。そして非行少年に関しても、その特徴の一つとしてセルフコントロールの低さが指摘されているほか（例えば小保方・無藤，2005a）、友人が非行をしても自身は非行をしない少年はセルフコントロール高いこと（小保方・無藤，2005a）、セルフコントロールと事後報告された逸脱行動の多さとの間に関連があること（鈴木・鈴木・原田・井口，1996）が示されている。我が国におけるセルフコントロールに関する実践研究は極めて少ないのが現状であるが、セルフコントロールの視点に立った有効な非行防止プログラムが検討されている（藤野，2010）。したがって、非行傾向行為／初発型非行とセルフコントロールとの関連についても検討することとした。

本研究の目的

以上より本研究は、中学生を対象とし、初発／非行傾向態度の特徴を明らかにすること、また初発／非行傾向行為と初発／非行傾向態度、社会的スキルおよびセルフコントロールとの関連を検討することを目的とする。

方 法

予備調査

初発／非行傾向態度を調査する項目を収集するため、以下の予備調査を実施した。

1) 研究協力者・実施時期 大学生16名（男12名、女4名、平均23.3歳）であり、2011年6月上旬

に実施した。

- 2) **調査内容** 小保方・無藤（2005a）が非行傾向行為および初発型非行として挙げられている5つ（喫煙，学校をさぼること，飲酒，夜遊び，万引き，自転車盗）について，自分が中学校の時の思い出したうえで，それらについての印象，経験の有無，経験がある場合はきっかけやその時の気持ちについて，自由記述方式での回答を求めた。

- 3) **調査手続き** 研究協力者は大学の講義後の時間などを利用して募集した。調査用紙は，第一著者が個人に直接配布し，後日回収した。なお，調査は無記名で行い，回収も個人のプライバシーが守られるよう配慮した。

- 4) **結果** 記述を KJ 法的手法によって整理したところ，①迷惑がかかる②よくない③かっこいい④楽しい⑤スリルがある⑥憧れ，の6カテゴリーが得られた。そこで，各初発／非行傾向行為について，この6つの表現を用いた質問項目を作成した。

本調査

- 1) **研究協力者・実施時期** 調査を打診し協力が得られた東北地方 A 県内の市立中学校3校の1—3年904名を対象とし，2011年10月上旬—12月上旬にかけて実施した¹⁾。

- 2) **調査内容** 本研究では以下の尺度を使用した。

- ・初発／非行傾向態度尺度：予備調査をもとに作成した，6つの初発／非行傾向行為に関する尺度（各6項目，4件法；全くそう思わない＝1—とてもそう思う＝4）。
- ・初発／非行傾向行為の経験：非行の捉え方で用いた初発／非行傾向行為の6つそれぞれについて，「したことがない」，「昔していて今はしていない」，「たまにしている」，「いつもしている」にて回答を求めた。
- ・社会的スキル尺度：戸ヶ崎ら（1997）の尺度を用いた。本尺度は25項目からなり，学校における適切な仲間関係への参加行動（8項目，以下，関係参加行動），仲間関係の維持行動（7項目，以下，関係維持行動），および仲間関係の向上行動（10項目，以下，関係向上行動）である（4件法；全然そうではない＝1—いつもそうだ＝4）。
- ・セルフコントロール尺度：上野・岡田（2006）

の尺度のうち，セルフコントロールに関する4項目を使用した（4件法；いつもできない＝1—いつもできる＝4）。

- 3) **手続き** 調査用紙は1組に綴じ，クラスの担任教師を通じてクラスごとの一斉方式にて実施された。調査は無記名式であり，その場で封をして回収がなされた。また，回答は任意である旨の説明も行った。

4) 分析対象者の選定

回答拒否，記入漏れあるいは記入ミスのあったものを除いた774名（1年；男子126名，女子127名，2年；男子129名，女子130名，3年生；男子135名，女子127名）を分析対象とした²⁾。回答傾向から，途中で回答を拒否したと判断されたものは12名（1.3%）であり，特定の学校・学級に偏ってはいなかった。また，記入漏れ・ミスはほぼすべての項目で発生しており，いずれも1.3%以下と極めて低い発生率であったこと，記入漏れ・ミスのあった生徒における記入漏れ・ミスの平均項目数は1.7個であったことから，記入漏れ・ミスの発生は完全にランダムな要因による欠測であるため，分析から除外しても問題はない，と判断した。

結 果

本研究の統計的検定では，帰無仮説の棄却を危険率5%で判断した。分析には，統計ソフト R（ver2.13.2）の関連パッケージを使用した。

初発／非行傾向行為の学年別の経験人数について³⁾

本研究の対象者の実態を把握するため，学年別の初発／非行傾向行為の経験人数をまとめたものを Table 1 に示す。なお初発／非行傾向行為を“昔し

Table 1 初発／非行傾向行為経験の有無と学年別での人数

	傾向／初発非行行為	
	経験なし	経験あり
1 年生	207 3.80*	46 -3.80*
2 年生	184 0.93	75 -0.93
3 年生	175 -2.84*	87 2.84*

上段は人数，下段は調整済み残差 * $p<.05$

ていて今はしていない”，“たまにしている”，“いつもしている”と回答した生徒の割合はそれぞれ少なかったことから，領域を込みにして，これらをまとめて「経験あり」として取り扱うこととした。なお，領域別の経験あり人数は，夜遊びが134人（18%），学校をさぼるが96人（12.4%），飲酒が39人（5%），自転車盗が21人（2.7%），喫煙が15人（1.9%），万引きが13人（1.7%）であった。

経験の有無と学年における人数の偏りを検討したところ（Table 1）， $\chi^2(2)=15.65$ と5%水準で有意であり，残差分析の結果，一年生は経験なしの度数が期待値より多く，三年生の経験なしの度数が期待値より少ないことが示された。

初発／非行傾向態度尺度の因子分析

初発／非行傾向態度の因子構造を検討するために，因子分析を行った。

はじめに平行分析を行ったところ，因子数は8つが適当である可能性が示唆された。続いて，最尤法による因子分析を行い，因子構造が比較的明確であって因子が解釈しやすいこと，1つの因子に3つ以上の項目が含まれることから，8因子解を採用した。最尤法，プロマックス基準の回転による因子分析結果をTable 2に示す。なお，一部項目は複数因子にわたって同程度の寄与率を示していたが，後述する内的一貫性（ ω ）の値が，項目を削除すると低下することから，因子負荷量の高い方の因子に含むこととした。

第1因子は，初発／非行傾向行為のほぼすべてに対して，“迷惑がかかる”や“よくない”といった項目が含まれることから，「初発／非行傾向行為への否定的評価」（以下，非行否定）と命名した。

第2因子は，初発／非行傾向行為のほぼすべてに対して，“スリルがある”という項目で構成されていることから，初発／非行傾向行為へのスリル希求（以下スリル希求）と命名した。

第3因子は，自転車を盗むことに対して肯定的な評価で構成されていることから，自転車盗への肯定的評価（以下自転車盗肯定）と命名した。

第4因子は，夜遊びに対して肯定的な評価で構成されていることから，夜遊びへの肯定的評価（以下夜遊び肯定）と命名した。

第5因子は，飲酒に対して肯定的な評価で構成されていることから，飲酒への肯定的評価（以下飲酒肯定）と命名した。

第6因子は，タバコに対して肯定的な評価で構成されていることから，タバコへの肯定的評価（以下タバコ肯定）と命名した。

第7因子は，万引きに対して肯定的な評価で構成されていることから，万引きへの肯定的評価（以下万引き肯定）と命名した。

第8因子は，学校をさぼることに対して肯定的な評価で構成されていることから，学校をさぼることへの肯定的評価（以下さぼり肯定）と命名した。

各因子の内的一貫性（ ω ）を算出したところ，順に $\omega=.86, .91, .95, .86, .94, .94, .92, .87$ であった。したがって，8因子構造は十分な内的一貫性を備えており，概ね満足できる想定であると判断された。

初発／非行傾向経験の有無による，初発／非行傾向態度・社会的スキル・セルフコントロール得点の差異の検討

次に，初発／非行傾向行為の経験の有無によって，初発／非行傾向態度，社会的スキル，セルフコントロールの各得点に違いがみられるかを検討するため，初発／非行傾向行為の経験と学年を要因とする，2要因の分散分析を行った。結果をTable 3に示す。なお多重比較にはシェイファーの方法を用いた。

初発／非行傾向態度の下位尺度のうち，まず非行否定については，経験および学年の主効果が有意であり，経験なしの方が経験ありより得点が高く，また1年生が2年生より得点が高いことが示された。効果量は，経験については $\eta^2=.10$ とやや大きく，学年については $\eta^2=.01$ と小さかった。

スリル希求については，経験の主効果および交互作用が有意であり，単純主効果の検定および多重比較を行ったところ，経験ありが経験なしより得点が高く，また経験ありの2年生が3年生より得点が高いことが示された。なお交互作用の効果量は $\eta^2=.01$ と小さかった。

自転車盗肯定については，主効果，交互作用とも有意であり，単純主効果の検定および多重比較を行ったところ，経験ありが経験なしより得点が高く，また経験ありの2年生が1年生および3年生より得点が高いことが示された。なお交互作用の効果量は $\eta^2=.02$ と小さかった。

夜遊び肯定については，経験および学年の主効果が有意であり，経験ありが経験なしより得点が高く，また2年生が1年生より得点が高いことが示され

Table 2 初発／非行傾向態度尺度の因子分析結果（最尤法，プロマックス回転）

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	h ²
I 初発／非行傾向行為への否定的評価（$\omega=.86$）									
11 学校をさばると人に迷惑がかかる	.66	-.02	.12	-.13	.12	.06	.01	-.06	.40
7 学校をさばるのはよくない	.64	.06	-.01	.01	.13	-.02	-.03	-.19	.46
17 親に隠れてお酒を飲むと人に迷惑がかかる	.64	-.05	.01	-.14	.02	.05	.08	.03	.42
21 子どもだけで遅くまで遊ぶと人に迷惑がかかる	.58	-.02	.02	-.14	-.04	.06	.09	-.04	.40
14 親に隠れてお酒を飲むのはよくない	.57	.06	-.02	.07	-.26	.04	.17	.03	.34
5 タバコを吸うと人に迷惑がかかる	.52	-.09	.09	.08	-.12	-.06	-.01	.19	.27
35 人の自転車を盗んだり，勝手に使ったりすると人に迷惑がかかる	.52	.00	.01	.17	.00	-.03	-.20	-.05	.38
29 店の物をお金を払わずに持ってくるのはよくない	.50	-.03	-.09	.14	.06	.04	-.12	-.08	.31
1 タバコを吸うのはよくない	.49	.00	-.02	.07	-.07	-.21	.03	.10	.34
26 店の物をお金を払わずに持ってくるのは人に迷惑がかかる	.44	.02	-.04	.02	-.15	.10	-.03	.08	.23
31 人の自転車を盗んだり，勝手に使ったりするのはよくない	.35	-.03	-.09	.06	.00	-.04	-.21	-.06	.35
II 初発／非行傾向行為へのスリル希求（$\omega=.91$）									
32 人の自転車を盗んだり，勝手に使ったりするのはスリルがある	-.08	.84	.31	.06	-.15	-.05	-.05	-.17	.76
28 店の物をお金を払わずに持ってくるのはスリルがある	.02	.81	.02	.05	-.08	-.04	.19	-.07	.70
18 親に隠れてお酒を飲むのはスリルがある	.04	.71	-.10	.03	.30	.03	-.08	-.01	.67
6 タバコを吸うのはスリルがある	-.04	.69	-.09	-.09	.03	.09	-.06	.14	.54
9 学校をさばるのはスリルがある	.02	.58	-.06	-.08	-.04	-.07	-.08	.56	.67
III 自転車盗への肯定的評価（$\omega=.95$）									
33 人の自転車を盗んだり，勝手に使ったりするのは憧れだ	.03	.06	.98	-.04	.07	.00	-.24	.06	.81
34 人の自転車を盗んだり，勝手に使ったりするのはカッコいい	.02	.01	.79	.05	-.01	.01	.08	.05	.78
36 人の自転車を盗んだり，勝手に使ったりするのは楽しい	-.10	.10	.63	.02	.01	.02	.08	-.04	.64
IV 夜遊びへの肯定的評価（$\omega=.86$）									
24 子どもだけで夜遅くまで遊ぶのは楽しい	-.12	-.05	.04	.85	-.04	-.04	.00	-.10	.64
20 子どもだけで夜遅くまで遊ぶのは憧れだ	-.01	.01	-.03	.72	.09	-.02	.03	-.05	.54
22 子どもだけで夜遅くまで遊ぶのはスリルがある	.10	.39	-.12	.64	.00	-.01	.05	-.02	.68
23 子どもだけで夜遅くまで遊ぶのはカッコいい	.04	-.01	.12	.59	.09	.10	-.01	.11	.65
19 子どもだけで夜遅くまで遊ぶのはよくない	.39	.10	-.01	-.40	.14	.02	-.01	-.03	.33
V 飲酒への肯定的評価（$\omega=.94$）									
16 親に隠れてお酒を飲むのは憧れだ	.01	-.01	.18	-.03	.92	-.03	-.24	.01	.74
15 親に隠れてお酒を飲むのは楽しい	-.06	.03	-.01	.09	.69	.01	.10	-.05	.68
13 親に隠れてお酒を飲むのはカッコいい	-.06	-.02	-.15	.05	.69	.00	.13	.09	.64
VI タバコへの肯定的評価（$\omega=.94$）									
4 タバコを吸うのは憧れだ	.06	-.04	-.01	.00	.05	.97	-.04	-.01	.85
3 タバコを吸うのは楽しい	-.06	.00	.06	-.05	-.11	.87	.05	-.04	.75
2 タバコをすうのはカッコいい	-.03	.04	-.02	.11	-.01	.65	-.06	.05	.53
VII 万引きへの肯定的評価（$\omega=.92$）									
30 店の物をお金を払わずに持ってくることは楽しい	-.03	.01	-.02	.03	-.12	-.01	.99	.01	.86
27 店の物をお金を払わずに持ってくることは憧れだ	.14	.01	.31	.03	.16	.05	.44	-.01	.63
25 店の物をお金を払わずにもってくるのはカッコいい	.04	.01	.17	-.02	.16	-.01	.43	.08	.48
VIII 学校をさばることへの肯定的評価（$\omega=.87$）									
8 学校をさばるのはカッコいい	-.09	-.04	.05	-.10	.00	-.02	.03	.81	.65
10 学校をさばるのは楽しい	-.20	.01	.01	.11	-.04	.05	-.01	.52	.51
12 学校をさばるのは憧れだ	.01	-.11	.12	.14	.23	.00	.00	.48	.56
因子負荷平方和	3.75	3.10	2.65	2.54	2.37	2.20	1.71	1.85	
寄与率	10.4%	8.6%	7.4%	7.1%	6.6%	6.1%	4.7%	5.1%	
II	-.29	—							
III	-.45	.43	—						
IV	-.42	.51	.34	—					
V	-.50	.48	.60	.52	—				
VI	-.44	.42	.57	.43	.61	—			
VII	-.45	.40	.71	.24	.63	.57	—		
VIII	-.41	.51	.45	.61	.63	.50	.43	—	

Table 3 初発／非行傾向行為の経験の有無と各学年における平均値、標準偏差および分散分析結果

	1 年生		2 年生		3 年生			F 値	(df)	η^2
	経験なし (N=207)	経験あり (N=46)	経験なし (N=184)	経験あり (N=75)	経験なし (N=175)	経験あり (N=87)				
初 発 ／ 非 行 傾 向 態 度	非行否定	39.2 (5.3)	34.3 (7.7)	37.6 (6.0)	32.6 (6.7)	37.6 (5.5)	33.9 (5.3)	経験 85.51 (1,768)*	.10	
								学年 3.55 (2,768)*	.01	
								交互作用 0.77 (2,768)	.00	
	スリル希求	6.9 (3.5)	9.7 (4.6)	7.0 (3.2)	10.4 (3.8)	7.4 (3.4)	8.6 (3.7)	経験 69.34 (1,768)*	.08	
								学年 1.94 (2,768)	.00	
								交互作用 5.86 (2,768)*	.01	
	自転車盗肯定	3.3 (0.9)	4.2 (1.9)	3.6 (1.5)	5.2 (2.4)	3.4 (1.0)	3.8 (1.4)	経験 69.64 (1,768)*	.08	
								学年 17.90 (2,768)*	.04	
								交互作用 10.38 (2,768)*	.02	
	夜遊び肯定	7.8 (3.2)	11.3 (4.4)	8.9 (3.6)	12.3 (4.3)	8.6 (3.2)	11.5 (3.3)	経験 128.91 (1,768)*	.14	
								学年 3.98 (2,768)*	.01	
								交互作用 0.51 (2,768)	.00	
	飲酒肯定	3.5 (1.1)	4.7 (2.4)	3.7 (1.4)	5.5 (2.4)	4.7 (1.4)	4.6 (2.1)	経験 92.73 (1,768)*	.10	
								学年 6.27 (2,768)*	.01	
								交互作用 4.50 (2,768)*	.01	
	タバコ肯定	3.6 (1.2)	4.2 (1.8)	3.9 (1.7)	5.7 (2.7)	4.1 (1.9)	4.6 (1.9)	経験 43.02 (1,768)*	.05	
								学年 13.06 (2,768)*	.03	
								交互作用 8.70 (2,768)*	.02	
	万引き肯定	3.3 (0.9)	4.3 (2.3)	3.4 (1.3)	4.7 (2.2)	3.4 (1.1)	3.8 (1.6)	経験 57.82 (1,768)*	.07	
								学年 6.81 (2,768)*	.02	
								交互作用 5.86 (2,768)*	.01	
	さぼり肯定	3.7 (1.3)	5.3 (2.3)	4.0 (1.7)	5.7 (2.2)	4.0 (1.5)	5.1 (2.0)	経験 105.30 (1,768)*	.12	
								学年 2.74 (2,768)	.01	
								交互作用 2.55 (2,768)	.01	
社 会 的 ス キ ル	関係参加行動	27.5 (4.1)	26.4 (4.3)	26.8 (4.4)	26.0 (4.4)	26.7 (3.6)	26.9 (4.2)	経験 2.69 (1,768)	.00	
								学年 0.95 (2,768)	.00	
								交互作用 1.33 (2,768)	.00	
	関係維持行動	24.0 (3.0)	21.6 (3.8)	23.6 (3.2)	21.8 (3.9)	23.7 (2.7)	22.4 (3.0)	経験 51.17 (1,768)*	.06	
								学年 0.70 (2,768)	.00	
								交互作用 1.36 (2,768)	.00	
	関係向上行動	31.7 (4.1)	29.5 (5.6)	31.5 (3.9)	28.9 (4.6)	31.4 (4.0)	30.5 (4.6)	経験 29.15 (1,768)*	.04	
								学年 1.49 (2,768)	.00	
								交互作用 2.47 (2,768)	.01	
	セルフ コントロール	12.0 (2.5)	10.5 (2.5)	11.6 (2.4)	10.2 (2.7)	11.9 (2.1)	10.5 (2.5)	経験 51.17 (1,768)*	.06	
								学年 1.34 (2,768)	.00	
								交互作用 0.05 (2,768)	.00	

() は標準偏差 * $p<.05$

た。効果量は、経験については $\eta^2=.14$ と大きく、学年については $\eta^2=.01$ と小さかった。

飲酒肯定については、主効果、交互作用とも有意であり、単純主効果の検定および多重比較を行ったところ、経験ありが経験なしより得点が高く、また経験ありの2年生が1年生および3年生より得点が高いことが示された。なお交互作用の効果量は $\eta^2=.01$ と小さかった。

タバコ肯定については、主効果、交互作用とも有意であり、単純主効果の検定および多重比較を行っ

たところ、経験ありが経験なしより得点が高く、また経験なしの2年生および3年生が1年生より得点が高く、一方で経験ありの2年生が1年生および3年生より得点が高いことが示された。なお交互作用の効果量は $\eta^2=.02$ と小さかった。

万引き肯定については、主効果、交互作用とも有意であり、単純主効果の検定および多重比較を行ったところ、経験ありが経験なしより得点が高く、また経験ありの2年生が3年生より得点が高いことが示された。なお交互作用の効果量は $\eta^2=.01$ と小

さかった。

さぼり肯定については、経験の主効果のみ有意であり、経験ありが経験なしより得点が高かった。効果量は $\eta^2=.12$ と大きかった。

次に社会的スキル尺度の各下位尺度に関して、まず関係参加行動については、主効果、交互作用ともに、有意ではなかった。

関係維持行動については、経験の主効果のみが有意であり、経験なしが経験ありより得点が高かった。なお効果量は $\eta^2=.06$ と中程度であった。

関係向上行動については、経験の主効果のみが有意であり、経験なしが経験ありより得点が高かった。なお効果量は $\eta^2=.04$ とやや小さかった。

最後にセルフコントロールに関しては、経験の主効果のみ有意であり、経験なしが経験ありより得点が高かった。効果量は $\eta^2=.06$ と中程度であった。

非行傾向行為の経験を判別する要因の検討

初発／非行傾向態度、社会的スキル、セルフコントロールが、初発／非行傾向行為の経験をどの程度区別できるかを検討するために、初発／非行傾向態度、社会的スキル、セルフコントロールの各（下位）尺度得点を説明変数、初発／非行傾向行為の経験の有無を基準変数とする、判別分析（ステップワイズ法）を行った。判別分析結果と標準判別係数をまとめたものを、Table 4 に示す。

Table 4 初発／非行傾向行為の経験の有無の判別分析結果

標準化判別係数	
非行否定	-.27
夜遊び願望	.54
飲酒願望	.30
セルフコントロール	-.30
グループ重心	
経験なし	-.31
経験あり	.85

分析の結果、ウィルクスの Λ は.79と有意な値を示した。判別率的中率は、経験なし群では73.3%，経験あり群では70.27%，全体では72.5%であり、比較的高い中率であると判断された。また標準判別係数から、夜遊び願望や飲酒願望が高い場合、初発／非行傾向行為の経験がある中学生が比較的多く、一方で非行否定またはセルフコントロールが高い場

合、初発／非行傾向行為の経験がない中学生が比較的多い、といえる。

考 察

初発／非行傾向行為の実態と初発／非行傾向態度の因子構造について

本研究では、学年が上がるにつれて、初発／非行傾向行為の経験人数が増加していることが示された。1年生は、小学校から中学校に進学した直後の学年であり、小学校時に身に着けた規範意識を保っていること、あるいは、反抗期と呼ばれる時期にまだ入っていない生徒が多いために、社会的なルールへの反発が少ないことが考えられる。本研究の結果は、1年生より2年生の方が非行が多くなる傾向にある、とする先行研究(小保方・無藤, 2006a)とも整合的な結果であるといえ、また一般的に規範意識は学年が上がるごとに低下する傾向にあるという指摘(廣岡・横矢, 2006)にも合致するといえる。

またこの結果から、1年生の期間中に非行への予防的介入を行うことが、その後の非行行為経験を防ぐのに重要である可能性が示唆される。なお、非行傾向行為の経時的変化を検討した小保方・無藤(2004b, 2006a)によると、非行傾向行為の経験あり群は、家族関係が親密でなかったり、友人関係で同調行動が多い傾向にあることが明らかとなっている。加えて、西野ら(2009)も、中学生の逸脱行動に友人の存在や親への愛着が関連する可能性を示しているほか、非行少年であっても、親しい友人とは深い交流を行っているという調査結果がある(藤野, 2002)。したがって、非行への対応に際しては、家庭との連携を図ったり、学校生活全般における友人関係を視野に入れた援助も考慮する必要があるだろう。

次に、初発／非行傾向態度尺度に対して因子分析を行った結果、「初発／非行傾向行為への否定的評価」(非行否定)、「初発／非行傾向行為へのスリル希求(スリル希求)」、「自転車盗への肯定的評価」(自転車盗肯定)、「夜遊びへの肯定的評価」(夜遊び肯定)、「飲酒への肯定的評価」(飲酒肯定)、「タバコへの肯定的評価」(タバコ肯定)、「万引きへの肯定的評価」(万引き肯定)、「学校をさぼることへの肯定的評価」(さぼり肯定)の8つの因子を想定することが最も妥当であった。この結果から、中学生

の初発／非行傾向への態度に関して、その否定的評価は自転車盗、夜遊び、飲酒といった内容によって異なるものではないものの、それらへの肯定的な態度は、内容によってそれぞれ異なって認識されている、ということが示唆される。したがって初発／非行傾向行為を予防するに当たっては、当該行為をなぜしてはいけないのか、といった教育的アプローチを行う際には、それぞれの内容ごとに丁寧に説明するなどして、それぞれの行為に関して肯定的な態度を持たせないようにする必要があると思われる。また、否定的評価と初発／非行傾向行為それぞれへの肯定的態度がどのように関連しあっているのか、時間経過による変化を検討する必要がある。

なお、夜遊び肯定のみ、他の初発／非行傾向行為と異なり、“スリルがある”および“よくない”の項目も含めて1つの因子にまとまっている。これは、夜遊びという非行傾向行為に対するスリルを求める感覚や悪いことであるという認識が、他のものと質的に異なっていることを示唆するものである。中学生は保健体育の授業などの機会を通じて、タバコが体に与える悪影響について学習しており、正しい知識を若い年代の頃から得られる環境にある。このように、飲酒やタバコは自身の身体に害をもたらす行為であると認識されている一方、夜遊びはそのような有害な行為とは受け取られていないのかもしれない。さらに、自転車盗や万引きのように、明らかな触法行為である、とも受け止められていないことが考えられる。したがって、夜遊びの予防については、他の初発／非行傾向行為と異なる対応を講じる必要があるのかもしれない。

なお、タバコに関しては、有害性を教育することが定着しているものの、一方で少年らの喫煙経験が未だなくならない。この理由に、身近な喫煙者の存在が挙げられている。辻・角田・鈴木・鈴木・上野・相澤（2008）は、家族の喫煙状況で父親の喫煙率については、喫煙経験のある男子生徒が喫煙経験のない生徒より有意に高い割合であると報告している。また、安藤・峠（2008）も、中学生がタバコを吸ったきっかけは「親・兄弟が吸っていたから」が最も多く、喫煙をしている生徒の保護者には、生徒の喫煙を容認する傾向があるとしている。このような、家族など身近な人の行為が影響を及ぼすことは十分に予想されるため、タバコに限らず、夜遊び、飲酒などについても、家庭と協力して一致した態度で予

防を行っていくことが必要であると推測される。

初発／非行傾向行為の経験の有無による各（下位）尺度得点の差異について

初発／非行傾向行為の経験の有無によって各下位尺度得点に違いがみられるかを検討したところ、まず、初発／非行傾向態度の非行否定は経験なしが経験ありより得点が高く、夜遊び肯定、さぼり肯定は経験ありが経験なしより得点が高かった。また、スリル希求、自転車盗、飲酒肯定、タバコ肯定、万引き肯定も経験ありが経験なしより得点が高く、かつ2年生で最も得点が高いという結果が得られた。非行傾向行為の経験が先立っているのか、こういった肯定的な感情が先であったかは明らかでないが、少なくともこういった傾向が、非行傾向行為の再体験、あるいはより重度な非行への移行につながる危険性は十分考えられる。したがって、先に述べたような支援を、得点がとりわけ高くなる2年生、またはその予防として1年生の時期に実施することが重要であると考えられる。

次に、社会的スキルの差異は、関係維持行動および関係向上行動において示され、いずれも経験あり群がなし群よりいくぶん低いという結果であった。親友や仲間からの強化が非行・問題行動傾向を助長させ、さらには適切な社会的スキルを学ぶ機会を減少させる（Capaldi, Stoolmiller, & Yoerger, 2001）といった指摘もあるが、本研究は1時点の調査であるため、初発／非行傾向行為を行ったために周囲の友人が離れていくなどして得点が低まった可能性と、そもそもこれらの得点が低いことから初発／非行傾向行為を行った可能性が考えられる。これらの因果関係については今後検討する必要があるが、初発／非行傾向行為を考える際に、社会的スキルの低さを考慮する必要性は示唆されたといえるだろう。

なお関係参加行動における差異は、本研究では示されなかった。1回の調査で関連がないことを断定することはできないが、非行傾向行為の有無によるストレスコーピングの違いを検討した小保方・無藤（2006b）は、非行傾向行為あり群であっても、抑うつ傾向の高低によって、ストレスコーピングの得点に違いがあることを見出している。この知見を援用すると、関係参加に係るスキルは、直接初発／非行傾向行為に直接的に関連するのではなく、抑うつ傾向による交互作用があるのかもしれない。

セルフコントロールに関しても社会的スキルと同

様に、経験あり群がなし群よりいくぶん低いという結果であった。これは先行研究（例えば小保方・無藤, 2005b, 2006a）と同様の結果であり、セルフコントロールについても、初発／非行傾向行為を考えるうえで重要な要因であることが改めて確認されたといえよう。

初発／非行傾向行為の経験を判別する要因の結果について

判別分析により、初発／非行傾向行為の経験ありとなしの区別に際して、非行否定とセルフコントロールが負の、夜遊び願望と飲酒願望が正の影響を及ぼしていた。非行傾向行為については、これまでに述べたように、小保方・無藤（2004a, 2005b, 2006a）も経験群におけるセルフコントロールの低さを指摘している。さらに小保方・無藤（2005a）は、非行に対する規定要因としてのセルフコントロールの影響は、学年があがるにつれて強まることを示している。本研究の結果、セルフコントロールは他の要因と比較しても相対的に大きな影響を有している可能性が示唆される。したがって、中学校在学期間にセルフコントロールを高めるための働きかけを積み重ねていくという視点が重要であると考えられる。

その他の下位尺度得点では、初発／非行傾向態度の非行否定および、夜遊び願望と飲酒願望が、判別に有意な影響を及ぼしていた。とりわけ、比較的罪悪感が低いことが予想される、飲酒や夜遊びに関する願望が影響していた点は注目に値する。本研究では、夜遊びの経験人数が最も多かったが、飲酒の経験者は分析対象者の5%と決して多くない。西野ら（2009）は、初発型非行よりも非行性の軽微な逸脱行為を経験する時点から非行性の深化が始まる可能性があることを指摘していることを踏まえると、一見些細なことと思われる飲酒への願望を抑制することが重要なかもしれない。特に河田（2001）は、飲酒経験のある人は、ない人に比べて薬物試飲の意思が高くなることが示されている。したがって、飲酒や夜遊びといった、他者に迷惑を直接的にかけられる可能性が低い行為であっても、その弊害や悪影響について、概念的な理解を含め丁寧に指導していく必要があると思われる。

今後の課題

これまでに述べてきた以外の今後の課題について述べる。まず本研究は、1時点の調査であるため、

時系列的な変化を加味した検証が今後の課題である。その際、小保方・無藤（2005b）が、非行傾向行為を行う生徒の中に、抑うつ傾向の高い一群を見出していることを踏まえると、個人的要因として抑うつ傾向をとり上げ、その影響を加味して検討するのも有意義であると考えられる。

また、本研究と先行研究で異なる結果が得られた箇所もある。例えば小保方・無藤（2004b, 2006b）は、学校をさぼる行為は女子に多いことを示しているが、本研究の予備的な分析で性差は示されなかった。小保方・無藤（2004a, 2006b）は東京都内の中学生を対象にしており、本研究は東北地方の中学生が対象である。こういった地域による特徴の違いについては、今後より詳細な検証が必要であろう。

<注>

- 1) 調査協力校には、平均得点を中心とした結果の概要と、先行研究や関連文献をもとに、現段階で考えられる対応に関する資料を作成し、フィードバックを行った。
- 2) 119名という多くの記入ミスが生じた点については、実施後の学校との話し合いから、行間が細かくすぎたことが記入漏れを誘発しやすいことが主な要因として考えられる。
- 3) 事前に男女差について検討を行ったものの、経験人数、各尺度得点に関してほぼ差異は見られなかったことから、本研究では学年差の結果のみを掲載・検討した。

引用文献

- 相川 充（1999）. 社会的スキル 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榎算男・立花政夫・箱田裕司（編）心理学辞典 有斐閣 pp 370-371.
- 安藤美津子・峠 哲男（2008）中学生の喫煙の現状と保護者の喫煙に対する意識の関与—喫煙に関する中学生と保護者の同時調査— 香川大学看護学雑誌, 12 (1), 7-17.
- Capaldi, D. M., Dishion, T. J., Stoolmiller, M., & Yoerger, K. (2001). Aggression toward female partners by at-risk young men: The contribution of male adolescent friendships. *Developmental Psychology*, 37, 61-73.

- Elliot, S. N., & Gresham, F. M. (1987). Children's social skills: Assessment and classification practice. *Journal of Counseling and Development*, **66**, 96-99.
- 江村理奈 (2007). 中学生に対するソーシャルスキル教育が仲間重要に及ぼす効果 宮崎女子短期大学紀要, **34**, 25-30.
- 藤野京子 (2002). 男子非行少年の交友関係の分析 教育心理学研究, **50**, 403-411.
- 藤野京子 (2010). 有効であるとされる非行防止プログラムについて (その 2) 早稲田大学社会安全政策研究所紀要, **3**, 3-25.
- Gottfredson, M. R., & Hirschi, T. (1990). *A general theory of crime*. Stanford, CA: Stanford University Press. (松本忠久 (訳) (1996). 犯罪の基礎理論 文憲堂)
- Gresham, F. M. (1986). Conceptual and definitional issues in the assessment of children's social skills: Implications for classification and training. *Journal of Clinical Children Psychology*, **15**, 16-25.
- 秦 政春 (2000). 子どもたちの規範意識と非行・問題行動 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, **26**, 123-155.
- 廣岡秀一・横矢祥代 (2006). 小学生・中学生・高校生の規範意識と関連する要因の分析 三重大大学教育学部研究紀要 (教育科学), **57**, 111-120.
- 法務省 (2011). 平成22年度版犯罪白書
- 五十嵐哲也 (2011). 中学進学に伴う不登校傾向の変化と学校生活スキルとの関連 教育心理学研究 **59**, 64-76.
- 飯田順子・宮村まり子 (2002). 中学生のストレス対処スキルの育成の試み 学校心理学研究, **2**, 27-37.
- 石井佑可子・新堂研一 (2011). 在宅非行少年における社会的スキルの様相—メタ認知, 対人的距離化スキルの観点から— 臨床心理学, **11**, 65-82.
- 磯部美良・堀江健太郎・前田健一 (2004). 非行少年と一般少年における社会的スキルと親和動機の関係 カウンセリング研究, **37**, 15-22.
- 河田史宝 (2001). 中学生の喫煙, 飲酒経験と薬物に対するイメージ—薬物乱用防止教育のあり方を探る— 研究紀要 (金沢大学), **44**, 135-139.
- 松井 洋 (2002). 日本の中学生の親子関係と非行的態度 川村学園女子大学研究紀要, **13**, 105-119.
- 松井 洋・中村 真・堀内勝夫・石井隆之 (2005). 非行的態度の抑制要因に関する研究 川村学園大学研究紀要, **16**, 27-44.
- 松嶋秀明 (2001). 非行少年を対象としたソーシャルスキルトレーニングにおける相互行為—少年自身の課題への意味づけの検討を中心にして— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), **48**, 175-184.
- 緑川 徹 (1999). 初発型非行—豊かさが生みだす浮遊非行— 清永賢二 (編) 少年非行の世界 有斐閣 pp37-65.
- 麦島文夫 (1990). 非行の原因 東京大学出版会
- 西野泰代・氏家達夫・五十嵐 敦・井上裕光・山本 ちか (2009). 中学生の逸脱行為の深化に関する縦断的検討 心理学研究, **80**, 17-24.
- 小保方晶子・無藤 隆 (2004a). 中学生の非行傾向行為について逸脱した友人の存在の有無による検討 お茶の水女子大学子ども発達教育センター紀要, **2**, 75-84.
- 小保方晶子・無藤 隆 (2004b). 中学生の非行傾向行為の実態と変化—1学期と2学期の比較— お茶の水女子大学子ども発達教育センター紀要, **1**, 89-95.
- 小保方晶子・無藤 隆 (2005a). 親子関係・友人関係・セルフコントロールから検討した中学生の非行傾向行為の規定要因および抑止要因 発達心理学研究, **16**, 286-299.
- 小保方晶子・無藤 隆 (2005b). 中学生の非行傾向行為と抑うつ傾向の関連 心理臨床学研究, **23**, 533-545.
- 小保方晶子・無藤 隆 (2006a). 中学生の非行傾向行為の実態と変化—1学期と2学期の比較— 心理学研究, **77**, 424-432.
- 小保方晶子・無藤 隆 (2006b). 中学生の非行傾向行為と抑うつ傾向との関連について—ストレスサーとコーピングからの検討— お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, **3**, 65-73.
- 崔 玉芬・庄司一子 (2010). 学校場面における中

学生のセルフ・コントロールに関する検討 共生教育学研究, 4, 51-62.

櫻庭隆浩・松井 豊・福富 護・成田健一・上瀬由美子・宇井美代子・菊島充子 (2001). 女子高生における『援助交際』の背景要因 教育心理学研究, 49, 167-174.

品田秀樹 (2008). 少年院における SST 前田ケイ・安西信雄 (編) こころの科学—本人・家族のための SST 実践ガイド— 日本評論社 pp60-67.

鈴木 護・鈴木真吾・原田 豊・井口由美子 (1996). 自己申告による中学・高校生の逸脱行為の広がりとその背景要因に関する研究 2 科学警察研究所報告 (防犯社会編), 37, 28-39.

戸ヶ崎泰子・岡安孝弘・板野雄二 (1997). 中学校の社会的スキルと学校ストレスとの関連 健康心理学研究, 10 (1), 23-32.

辻 雅善・角田正史・鈴木礼子・鈴木恵子・上野文彌・相澤好治 (2008). 小・中学生の喫煙に関する意識と行動—地域における喫煙防止活動のために— 目白大学短期大学部研究紀要, 44, 85-96.

上野一彦・岡田 智 (編) (2006). 特別支援教育実践ソーシャルスキルマニュアル 明治図書

(2012年 5 月 8 日受付)

(2012年 7 月18日受理)

